

令和2年度第1回長野県社会教育委員会議 議事概要

日 時：令和2年8月3日(月) 13時30分から16時  
場 所：県立長野図書館 信州・学び創造ラボ  
出席委員：黒岩 裕子委員 小池 玲子委員 小林 公子委員 中條 智子委員  
中田 安子委員 長峰 夏樹委員 西 一夫委員 原田 良介委員  
欠席委員：松谷 かおる委員  
県出席者：塩野 英雄教育次長 小林 司生涯学習課長 春原 直美企画幹兼課長補佐  
兼総務係長 山本 千鶴子課長補佐兼生涯学習係長 赤津 英男担当係長  
小澤 多美子主査 後藤 卓己主任指導主事 楠 武明指導主事  
山辺 浩指導主事

1 開会

2 教育次長挨拶

長野県教育次長の塩野英雄と申します。

令和2年度の長野県社会教育委員会議の開催に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

委員の皆様、本日は、ご多用の中、県下各地よりご出席をいただきまして誠にありがとうございます。

皆様には、日頃より本県の教育行政に、深いご理解とご協力をいただいておりますことに対しまして、敬意と感謝を申し上げる次第でございます。

さて、県教育委員会では、学びの力で未来を拓き、夢を実現する人づくりを基本理念とした第3次長野県教育振興基本計画を策定し施策を推進しております。その中で基本目標として3項目を掲げております。

1つ、生きる力と創造性を育む信州ならではの学びを実践します。2つ、社会全体で、すべての子どもたちが、良質で多様な学びの機会を享受できるようにします。3つ、誰もが、生涯、学び合い、学び続け、自らの人生と自分たちの社会を創造できる環境をつくりますとしております。

これらの基本目標を達成するために、教育委員会だけでなく、様々な関係機関と連携・協働しながら、各事業の着実な実施を進めております。

そして、人生100年時代を迎えようとする中、子どものみならず私達大人の学びも大変重要になってくると考えております。そのため、県教育委員会としましては、公民館や生涯学習推進センター等とも連携しながら、大人の学びに関しまして力を入れております。本県で学ぶ誰もが、生涯にわたって、心豊かな暮らしを実現し、学び続けていけることができる長野県を目指してまいりたいと考えております。

また、未来について予測困難な社会を迎えるにあたり、自ら将来を切り拓き、夢を実現する力を身に付けるための社会に開かれた教育課程の重要性が学校教育で指摘されるようになってきました。本県ではそれに関して、既に信州型コミュニティスクールとして以前より取り組んできております。ご存じの方も多いと思いますが、信州型コミュニティスク

ールでは、学校・家庭・地域が目標やビジョンを共有し、連携・協働して取り組む、地域と共にある学校づくりを推進しております。本日は、公立大学法人長野大学より早坂淳教授をお招きし、信州型コミュニティスクールの充実に向けた意見交換を計画しております。

委員の皆様には、本県の社会教育・生涯学習の充実発展はもとより、未来を創造する子どもたちのために、豊かなご経験やご見識に基づく様々な角度からのご意見・ご提言を賜りますようお願い申し上げます。挨拶といたします。

本日は、よろしく願いいたします。

### 3 自己紹介

#### 【黒岩委員】

皆さんこんにちは。昨年度よりお世話になっております長野県 PTA 連合会の監事をしておりました黒岩裕子と申します。PTA活動に長きにわたってかかわってきました。本日はどうぞよろしく願いいたします。

#### 【小池委員】

長野県社会教育委員連絡協議会の会長をしております小池玲子と申します。現在、1つの小学校でコーディネーター、1つの中学校で運営委員、1つの中学校で同窓会の副会長をしております。どうぞよろしく願いいたします。

#### 【小林委員】

元長野県公民館運営協議会の会長をしておりました小林公子でございます。現在も長野市の芋井公民館の館長をしております。どうぞよろしく願いいたします。

#### 【中條委員】

皆様こんにちは。長野県連合婦人会の会長をしております中條智子です。今日の話題につきまして、私の関係している組織ともかかわってくることなので私自身考えることがたくさんあります。よろしく願いいたします。

#### 【中田委員】

皆さんこんにちは。元長野県社会教育委員連絡協議会の理事をさせていただきました中田安子と申します。松本市の第三地区公民館の館長と信州型コミュニティスクールのコーディネーターを6年させていただき、今も社会教育委員として小学校から大学まで学校にかかわらせていただいております。よろしく願いいたします。

#### 【長峰委員】

長野県社会福祉協議会の長峰夏樹と申します。総務部とまちづくりボランティアセンターを所管させていただいております。県内には熱意あるボランティアコーディネーターがたくさんおります。ぜひ連携のきっかけになればと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

【西委員】

こんにちは。信州大学の西でございます。今回は信州型コミュニティスクールということですが、小学校では地域に開かれた学校のあり方について本年度より新しい教育課程が実施されております。現在のコロナ禍の中で学習の遅れをどうするのか、学びをどう実現させるのかなどが大学の中でも議論されています。本学では、学生と対面することなく前期を終えようとしています。本日は教育や学びについていくつかの切り口で皆さんとディスカッションできることを楽しみにしています。よろしく願いいたします。

【原田委員】

皆さんこんにちは。5年前まで綿内小学校の校長をしておりました原田良介と申します。ちょうど信州型コミュニティスクールが始まった頃、学校でかかわっておりました。学校内部としての感想や意見が出せればと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

【早坂教授】

皆様こんにちは。長野大学の早坂淳でございます。長野県における信州型コミュニティスクールの調査として、データの収集やまとめを行ってきました。本日はその調査・分析の概要版について皆様と共有させていただきます。また、それをきっかけに、ここ信州でのこれからの学びのあり方について一緒に議論できることをとても楽しみにしてまいりました。よろしく願いいたします。

#### 4 議事

(1) 議長の選出

西委員を選出。

(2) 協議

【西議長】

では、よろしく願いいたします。

本日の会議は16時終了予定ということになっておりますので、皆さまのご協力のほどをよろしく願いいたしたいと思っております。

では、これから協議に入ってまいります。お手元の配付資料の議事次第に従って進めてまいります。

最初に、議案1「信州型コミュニティスクールの現状について」、事務局からの説明をお願いいたします。

【県 山本】

長野県教育委員会で進めております信州型コミュニティスクールの現状について説明させていただきます。長野県では以前より地域の方が学校へ支援に来ていただける状況が当たり前のように見られていました。それらの良さを、組織的、継続的に進めていくために平成25年度より信州型コミュニティスクールという取り組みを始めました。信州型コミ

ユニティスクールとは、「学校運営への参画」「学校支援」「学校関係者評価」の3つの機能を一体的、持続的に実施する仕組みのことを言っています。

信州型ユニティスクールの現状ですが、現在、県内全ての公立小中学校に信州型ユニティスクールの仕組みが整っています。そして、多くの学校において運営委員会の中で、学校支援の活動について話題にされています。信州型ユニティスクールの取組が進められて以降、学校支援活動が今まで以上に活発になってきています。

運営委員会まとめの会などの中で、地域の方のやりがいや元気につながるというような報告が多く聞かれるようになってきました。具体的には、「子どもたちから次も来てくれると聞かれると私も頑張らなきゃとパワーをもらっています。」「絵本を通して子どもたちと共感ができること、私を覚えてくれていて声をかけてくれるその嬉しさなど子どもたちに喜んでもらえることがやる気につながっています。」などの話が聞かれました。

学校職員からは、「やれることは何でもお手伝いしますよ。と多くの地域ボランティアの方が声をかけてくださる」、「支援を繰り返してくださる中で、教育活動としての意図を理解して下さり、質的に充実した支援をしてくださる方が増えてきた」などの感想が聞かれるようになりました。子どもを真ん中にして、ボランティアにとっても教師にとっても有意義な取組になってきています。

また、当初は「ゲストティーチャー型」のボランティア支援が多く見られましたが、今では、「学習アシスタント型」や「環境サポーター型」など支援のタイプも広がってきています。

学校では、「総合的な学習の時間」を中心に、地域について学ぶ「ふるさと学習」に力を入れる学校も多くなっています。中学校では、学んだ内容を本当の市町村議会に提案する「中学生議会」などの学習も広がってきています。新学習指導要領で「社会に開かれた教育課程」ということが示されましたが、今後、学校でもこのような活動が広がっていくと考えられます。

地域の方が学校支援を当たり前のようにして行っていたという長野県の良さを活かしてスタートした信州型ユニティスクールの取組ですが、学校支援ボランティアの充実や学校支援活動から協働活動への質的転換などの成果が見られます。しかし、課題もいくつかあります。1つは、コーディネーターにかかわることです。地域と学校をつなぐコーディネーターの多くは学校職員が務めているという実態があります。地域住民が中心的なコーディネーターを担っている学校は544校中の159校のみです。異動のある学校職員がコーディネーターの中心を担うより、地域住民が中心になる方が活動の持続性が高まると考えられます。地域コーディネーターの主な役割は、学校長や先生方とのコミュニケーション、子どもたちや保護者・PTAとのコミュニケーション、地域住民とのコミュニケーション、その他、事務処理や情報発信等になります。

コーディネーター以外では、学校運営委員会の進め方に課題があると考えられます。成果として学校支援活動について活発に意見交換がなされていることを先に触れましたが、目指す子ども像や目標、ビジョンの共有が充分になされていない学校があります。目標をはっきりさせないまま活動がどんどん行われているという状況が見られます。

しっかり目標を共有し、協働的な活動を進めているいくつかの学校の中で、大町市立美麻小中学校の取組を簡単に紹介します。美麻小中学校の学校教育目標は「心と体をひらい

て学ぶ美麻の子」となっています。それとは別に地域と学校が共有する目標として「学校と地域・保護者が連携・協働して地域を愛する子どもを育む」を掲げ、地域住民も学校職員も子どもたちへ同じ願いをもって教育に当たっています。

美麻小中学校の学校運営協議会は年3回開かれます。そして、12月に開かれる2回目の学校運営協議会で「学校自己評価」も踏まえながら、「学校づくりの評価」「授業づくりの評価」としてこれまでの取組の評価が行われます。その中で、目指す子ども像と具体的な活動についての意見交換が行われます。具体的には“夢や希望、将来への期待がもてる児童生徒の育ち、自己有用感を培う児童生徒を期待し、市民科（いちみんか）や夢の時間を始め、全教育活動でキャリア教育を進める”、“教室には入れないが、学ぶ意欲はあるという子どももいる。学校以外で学ぶことができたらと思う”、“美麻に行けば地域も学校もすごいぞと言われるくらい動くことが大切ではないか”などの意見交換が行われました。

美麻小中学校では「学校と地域・保護者が連携・協働して地域を愛する子どもを育む」を実現するために『市民科』という学習を総合的な学習の時間を使って行っています。大学の支援も受けながら、地域の自然、文化、住民との対話、協働を通し、“ふるさと美麻を愛し、語り、想いを続ける児童生徒”の育成を目指し、学年ごとに研究テーマを設定して進めています。5学年は「田んぼ」、8学年になる中学2年生は「花豆」、9学年になる中学3年生は「美麻かるた」です。6学年と中学の1学年はこれから活動が決めます。また、年間8～10時間を使って『夢の時間』を実施しています。5年以上の児童生徒が、各自の興味関心を基に個人テーマを決めて、夢や希望、自己実現を求めて自己に向き合いながら個人追及することで、卒業後も自己実現に向けて生涯学び続けることができる児童生徒の育成を目指しています。

美麻小中学校では、学校運営協議会での話し合いと具体的な活動、評価がPDCAサイクルとして位置づけられ、修正がなされたり新たな取組が加えられたりすることで継続・発展する仕組みとなっています。

長野県教育委員会としましては、信州型コミュニティスクールがさらに促進されていくために、地域コーディネーターの育成、学校運営委員会の活性化などに向けた支援のための取組を進めております。以上で、信州型コミュニティスクールの現状についての説明を終わります。

#### 【西議長】

ありがとうございます。続きまして「信州型コミュニティスクールアンケート結果」につきまして、長野大学早坂淳教授から説明をお願いします。

#### 【早坂教授】

これから20分ほど長野県におけるコミュニティスクールに関する実態調査の中で皆さんと共有したいと思う大切な部分についてお話しをさせていただきます。資料をご覧くださいながらお聞きください。

始めに、このアンケート結果について3点共通理解させてください。1点目として、このアンケート調査は、県内544校の公立小、中の義務教育学校を対象に行いました。そし

て、長野県教育委員会、市町村教育委員会のご協力を得て回収率が100%という貴重なデータとなりました。2点目として、長野県では信州型コミュニティスクールと学校運営協議会制度に基づくいわゆる国のコミュニティ・スクールの2つのコミュニティスクールがありますが、どちらも対象としています。3点目は、この調査の回答者を学校長としました。そのため、学校長から見たコミュニティスクールの実態となります。立場を替えるとコーディネーターから見たコミュニティスクール、保護者から見たコミュニティスクール、行政から見たコミュニティスクールなどそれぞれ見え方が違ってきます。

今回発表させていただく内容は、設問と設問の結果を掛け合わせたクロス集計の結果からみえてきたこと、先行研究である日本大学佐藤晴雄先生の全国調査との比較からみえてくる信州らしさということの2点についてお話をさせていただきます。

まず、資料第一部のクロス集計結果と分析をご覧ください。1つ目として、Q1～4のコミュニティスクール関係認識を問うた部分についてです。Q1～4は「教職員」、「児童生徒」、「保護者」、「地域住民」それぞれの当事者が学校とうまくやっているかを問うた部分です。その4つの間いと、その学校にコミュニティスクール専用の部屋があるかという問いを掛け合わせたクロス集計から見えてきたことについてです。はっきりと結果に出てきているのですが、コミュニティスクール専用の部屋がある学校は、教職員、児童生徒、保護者、地域住民との関係がよいということがわかってきました。特に、地域住民にかかわってみますと、コミュニティスクール専用の部屋がある学校で関係が良いという割合は82%、専用の部屋がない学校で関係が良いという割合が65%と大きな差が表れています。この結果から、地域の方と良い関係を作るには学校内に招くべきということが言えます。

次ですが、コミュニティスクールの設置経緯と成果認識をクロスさせた結果についてです。コミュニティスクールの設置経緯としていくつかのパターンが確認されます。学校自身の意向で設置した学校、保護者や地域から声が上がった学校、教育委員会などの意向で設置することになった学校などがあります。学校や保護者、地域など自分たちで設置しようとした学校をボトムアップ型と言います。それとは別に、指示がありその指示に合わせて設置していった学校をトップダウン型と言います。ボトムアップ型とトップダウン型で成果認識がどうだったかをみました。「学校が活性化した」、「家庭の教育力が向上した」、「いじめ・不登校・暴力など生徒指導の課題が解決した」など20の成果認識をみますと、全ての成果認識においてボトムアップ型がトップダウン型を上回るという結果が出ました。ボトムアップ型の方が当事者意識が高いということは何となくわかりますよね。全国においても長野県においてもそうなのですが、多くはトップダウン型の学校となっています。長野県の課題としてトップダウン型の学校職員が地域の方とどう当事者意識を共有していくかということが言えると思います。

中心的なコーディネーターの属性と成果認識のクロス集計からもはっきりした結果が出ています。中心的なコーディネーターが「学校職員」、「地域住民」、「行政」の中で地域住民が担っている場合、成果認識が高くなっています。特に強調したいこととして、「児童生徒の学力が向上した」、「保護者や地域からの苦情が減った」という2点の成果認識において大きな差がみられたことを挙げておきます。保護者や地域からの苦情については、単純集計で県全体を平均的にみると苦情が減ったという認識は高くありません。しかし、中心的なコーディネーターを分けてみると差が見られます。地域の方が中心的なコーディネ

ーターを担っていると苦情が減るという結果がみえます。

この調査で長野県教育委員会の要望もあり、ボランティア組織があるかないかについて問いました。ボランティアの方が個々で活動されているということはどこでもあります、組織化されているかどうかについて問いました。それと、成果認識をクロス集計しました。ボランティア組織がある学校の成果認識が高くなっています。このことから、ボランティアは個々として存在するだけでなく組織化されることが大切であることがわかります。

次ですが、長野県内の信州型コミュニティスクールと国型コミュニティ・スクールの学校について成果認識を比較すると、相対的に国型コミュニティ・スクールの成果認識が高くなっていることがわかります。そして、教職員が「がんばっていますか」とか「理解していますか」など教職員の関係認識をみますと、7項目中4項目において国型コミュニティ・スクールが高くなっています。特に、「地域住民と積極的に交流している」、「学校支援ボランティアの活用に積極的である」の2点については大きな差がみられました。児童生徒の関係認識と保護者の関係認識をみますと、教職員の関係認識ほどの差はみられません。地域住民との関係認識では、7項目全ての項目で国型コミュニティ・スクールの方が高いという結果になりました。ただ、地域住民との関係については、全国を対象にして行われた調査結果と比べると信州型コミュニティスクールにおける地域住民との関係においても全国の結果より高い関係認識がみられました。このことから、長野県の特徴を1つ挙げるとすると、地域の方の学校へのまなざしが温かく、学校に深くかかわってくださっていると言えると思います。地域と共にある学校づくりという理念が浸透していると言えるのではないのでしょうか。

国型コミュニティ・スクール(学校運営協議会)と信州型コミュニティスクール(学校運営委員会)についてですが、違いを一言で言うと法的権限があるかないかです。もう少し言うと、学校運営協議会の中で教職員の人事について議論の対象になるかならないかです。国型コミュニティ・スクールは教職員の任用について議論の対象とし、意見表明を法的に認めています。信州型コミュニティスクールは法的なバックアップはなく、そもそも教職員の任用について、学校運営委員会の中での意見表明は議論の対象として想定していません。調査の自由回答における人事言及率をみると33%と約三分の一となっています。このことから学校運営協議会が人事に言及するかどうかについては、県内の強い抵抗感や警戒心がみられます。人事にかかわっては全国的に、昭和36年の地方教育行政の組織及び運営に関する法律の改正で都道府県教育委員会に人事権が移っていったという経緯があります。しかし、長野県の人事方式では学校長が各学校の意向を吸い上げ、学校長の意見を市町村教育委員会へ伝え、市町村教育委員会が県の教育委員会へ内申するという、本当に学校に必要な先生はどういう先生なのかをボトムアップで考えていくという仕組みになっています。このやり方なので、人事は自分たちで進めていくという意識が強くなるためか、教職員の任用への反発は強くあります。

最後に、佐藤晴雄先生が行われた全国のコミュニティ・スクール調査と今回長野県で行ったコミュニティスクール調査から何がみえてきたかということです。関係認識と成果認識の2点で比較、分析を行いました。時間もなくなってきましたので急いで説明させていただきます。

長野県では、地域住民との関係に関わる内容の関係認識が全て高くなっています。長野

は地域の方との関係性が全国的にみてうまくいっているということが言えます。このことは、長野県の特徴だと考えられます。また、成果認識においても長野県に高い数値がみられます。「学習意欲の向上がみられた」という成果認識においては全国と30%近くの差がみられます。これは、長野県が信州型コミュニティスクールの取組を進めたからとか国型のコミュニティ・スクールになったからというのではなく、それ以前から地域と学校との関係性が良好だったからだと思います。そこには、地域の人が、子どもたちの教育を学校任せにしてこなかったという歴史があるのかもしれませんが。

もっとたくさん皆さんにお伝えしたいことはあるのですが、時間の関係で以上とさせていただきます。

**【西議長】**

では、大きく2つ、長野県らしさを生かした取組と子どもたちに願う姿について議論を進めていきたいと思えます。まず、始めに長野県らしさを生かした取組にかかわって自由にご意見をお出しただければと思います。

**【原田委員】**

早坂先生ありがとうございました。先生のお話をお聞きしながら、私も長野県らしさとして昔から地域とのつながりが強い絆としてあったところだと思っています。それは、学校の卒業生が地域にどれくらい残っているかと関係すると思っています。私が最後に勤めました綿内小学校では卒業生のかなりが地域に残っています。私が綿内小学校に赴任したのは平成25年頃でしたが、すでに登下校の見守りや読み聞かせなど色々なところで地域の方がかかわっていらっしゃいました。信州型コミュニティスクールを始めると言われた時には、あらためて何をやるのか。すでにやっているじゃないかというのが感想でした。もうそのような取組のあるところでは、コーディネーターを設置しろなどと言われたことが大変でした。どうしても行政的な発想があると感じました。

私の学校では、現実的な実態からコーディネーターは教頭先生にお願いするようにしました。信州型コミュニティスクールを始めると困ったのは中学校だったのではないかと思います。中学校は地域が大きくなってしまいます。私の近くには若穂中学校がありましたが、地域は綿内、保科、川田と3つになります。広い地域がまとまって学校を支えていくのは難しかったと思います。そのようなこともあって、私たちの地域では、若穂コミュニティスクールとして中学校も小学校も一緒に進めました。そして、小学校のボランティアの情報を中学校と共有したりしました。

さきほどの長野県教育委員会からの説明にありましたが、信州型コミュニティスクールとして運営委員会を設置し、地域の方に学校運営に参画していただくと言っても、地域の方も困ったように思います。また、学校としても学校支援活動や学校評価などそれぞれすでにやっていたことをあらためて運営委員会の中でやるように言われ、逆に負担になりました。そのような負担を今後どのように解消していくかが課題だと考えています。

**【西議長】**

原田委員より小学校での信州型コミュニティスクールのお話をいただきました。中学校

にもかかわっていただいている小池委員いかがでしょうか。

**【小池委員】**

まず、始めに小学校に30年程かかわっている立場からお話をさせていただきます。学校にかかわって感じていたことですが、どうして校長先生が変わると学校の基本目標や方針が変わっていくのかが不思議でした。そんなことでいいのかなという思いがありました。基本目標は地域のみinnで共有することが大切だと思います。

小学校では、目標を共有しやすいように感じていますが、中学校はどうしても学力の方に傾いてしまって、地域人としての成長の部分が少し難しくなるように思います。そのため、学習支援や環境支援などボランティアさんお願いしますということはありませんが、地域の方と共に成長していくということがまだまだ難しいのかなと感じています。そのような中でも、総合的な学習の時間に生徒が地域に出て、地域の方とかわって活動することが増えてきているように思います。防災の授業で中学生が地域に出て、地域の方とかわって中心になって活躍するということがありました。

運営委員会で地域とどうかわるかということをもっと話題にすればいいと思います。また、中学校は困っていることや課題を素直に出して協力者やボランティアをお願いするなど、地域へどんどん発信していくことが必要だと思います。そして、地域の皆さんと一緒に進めていくことが大切だと思います。

**【西議長】**

P T Aの立場から黒岩委員さんいかがですか。

**【黒岩委員】**

私は息子が3人おりましたので長いこと学校にかかわっております。小学校だと地域と関わりやすいと感じます。見守りをやってくさっている方、どこそこの～さんなど子どもたちと地域の方が密な関係にあると思います。中学生は生徒自身で動けるということがあり、足りない部分は職員が補ったりしているので、P T Aとしても中学校になるとかわる部分が減ってきます。資源回収でトラックを出すとか、グラウンドの整備を行うなどどうしても大人の手が必要という部分になってしまい、疎遠になってしまっているように感じます。

ただ、私個人としては中学生という大人になる一歩手前の時期に、ああいう大人になりたいという地域の大人への憧れを持ってほしいと思っています。私の住んでいる高山村は一村一校なので、小学校から中学校と同じ顔ぶれで、地域の方もあの子あんなに大きくなったんだというような雰囲気にかかわってくださることが多くあります。都市部にいけばいくほど大変になっていくように感じます。ましてや、この春からのコロナ禍で他者とのかわりが途絶え、家庭でもぎくしゃくすることがある中では、地域の方のかわりによって子どもたちの成長を認めていただけることがあるとありがたいと思います。子どもの成長の場をみていただいたりかわっていただいたりするには大人のマンパワーが重要だと思っています。私が嫁いだ家では祖父や祖母がいたので、子ども一人に色々な視点でみてくれる大人がいました。そして、叱るべき時には叱ってくれ、褒めるべき時には褒めてく

れました。核家族になると親が叱るにも同じ内容の繰り返しになり、自分の意見を押し付けて子どもの自己肯定感の芽を潰してしまっていないかと心配です。私はボランティアとして学校にかかわったり社会教育委員にもなっていたりするので、今後どうしていけばいいのかと考えています。

**【西議長】**

ありがとうございました。主に学校に直接かかわっていらしゃる方々からお話をお聞きしましたが、早坂先生何かコメントはありますか。

**【早坂教授】**

色々な方のご意見を直接聞かせていただくいい機会となっておりありがたいです。中学校にかかわった意見が皆さんからありましたが、第二次性徴で心と体が大人になっていく大事な時期に多様な大人の価値観に触れられるか触れられないかは、その後の子どもの多様性の育成に大きくかかわってくると思います。核家族が多くなってきている現状において、コミュニティスクールに期待される部分が大きくなっています。地域とのかかわりが難しくなってくる中学校という時期に学校の価値観だけでなく地域の価値観も含めて子どもを育てるということをどう広めていくのかという課題が皆さんと確認できたように思います。

**【西議長】**

学校とは違う社会の組織として子どもたちにかかわっている委員の皆さんに出席いただいています、それぞれのお立場から学校がどうみえているのかご意見をお出してください。

**【長峰委員】**

調査結果から、地域とのかかわりがうまくいっていることがわかり誇らしく思います。ただ、私たちを含め、地域の側からはまだまだ学校との関係を深めたいという気持ちがあります。つい数ヶ月前に我々の全国組織である全国社会福祉協議会より、長野県内のある村の中学校から福祉体験の講師の依頼があったと連絡があり、それを地元に戻してということを行いました。こういうことはまだ他にもあります。信州型コミュニティスクールの中では、地域コーディネーターの重要性や地域人材の発掘について触れられていますが、その面での協力体制が今以上に深まればと思っています。

**【中田委員】**

松本市は信州型コミュニティスクールの松本版として進めています。何が松本版かと言いますと、市内35地区公民館長がコーディネーターを行っています。ほとんどの公民館長は地域から選ばれた人です。だから地域住民がコーディネーターを行っていることとなります。

私は6年間館長をやらせていただきました。松本では信州型コミュニティスクールが始まる前から学校応援団という形で学校とかかわってきた公民館がたくさんありました。そのような中でコミュニティスクールをと聞いた時、もうやってるじゃんと思いました。そして、応援団をコミュニティスクールとして運営委員会を開くようにしました。私たちに

とっては学校評価という部分が難しかったです。私の公民館は小学校にも中学校にもスムーズにかかわることができました。学校からボランティアの依頼があると公民館で探して紹介しました。地域としては、地域のことをもっと知って地域を愛して、大学が終わってから地元に戻ってきてくれる子どもを育成したいという目標があります。中学校では色々な方が生徒にかかわって地域の学習をしています。小学生では地域の伝統行事を伝えていくことに力を入れています。保育園などのもう少し小さい時期から地域とかかわってあげればよいと思っています。

運営委員会の中で中学生と意見交換することを年に1回行っています。その中で、大学生になって東京などに行った人が地域の自慢と聞かれて答えられないという人が多くいることが話題になりました。それを受けて、中学生からもっと地域のことを知りたいという話が出ました。また、年齢の近い人から進学する高校選択について意見を聞きたいという希望がありました。それを受けて、中学生と高校生や大学生との交流の機会が提供できればと考えています。

これからは、元公民館長の組織を作って、学校に協力していきたいと思っています。色々な人が連携して地域と子どもたちが win-win の関係になればよいと思っています。

#### 【中條委員】

中田委員のお話をお聞きしながら、松本のコミュニティスクールをモデルにして、皆さんで視察に行ければよいと思いました。

早坂先生の調査の中にあります、信州型コミュニティスクールに関する自由記述に以下のような意見がありました。「地域の方が学校に入り、生徒の学びを支えてくださることは、大変ありがたい機会である。教職員とまた違うかかわりを持っていただき、生徒たちとも暖かな触れ合いが生まれている。一方で、コミュニティスクールありきの活動になってしまわないように留意する必要がある。目指すところは、地域の方と学校とが手を携えて、生徒たちが豊かな学びを得て、さらには地域の教育力が向上していくことが望ましいのであり、ただ単に地域の方に来ていただき単発的な体験をしたり、無理をして学習の機会を作っていくことは避けるべきである。それでなければ、コミュニティスクールを掲げても、いつか学校も地域もお互いに無理が生じ、破綻するのではないかと危惧される。コミュニティスクールが今後も継続し、地域力が自然な形で学校運営に生かされるよう考えていかねばならないと思う」。こういうお考えの方が多いのではないかと思います。学校と地域の結びつきはできていて、ボランティアにも参加いただいていると思います。その次に進むためにはしっかりしたコーディネーターがいるということが大切であると思います。そこで、松本方式は大いに参考になりました。これからは、信州型コミュニティスクールの質的向上や地域へ発信する力を強めることが課題だと思います。

早坂先生の調査から色々なボランティアがあることがわかりました。私も色々な団体にかかわっていますが、先生の調査について教育委員会だけでなく、長野県全体に知っていただきたいと思いました。そのことが長野県の発展につながっていくと思います。

#### 【西議長】

公民館活動についての話題が出ましたが、小林委員いかがでしょうか。

【小林委員】

公民館の立場で日々感じていることを話させていただきます。早坂先生の調査結果をみさせていただいたことはとても幸いだと感じました。そして、この調査をさらに生かしていただきたいと思いました。先生のお話にあったトップダウン型とボトムアップ型の成果認識の差を埋めるにはどうすればいいのか教えていただきたいです。そこから、私も学びたいと思います。

私の公民館では、3年目ぐらいになりますが公民館講座に地域の方、児童、先生が参加しています。例えば、苔玉作りがあります。班を作る時には、地域の方と児童と一緒にするようにしています。すると、こうやってやるんだよなどと地域の方と児童がとてもいいかわりをみせますお互いにとっていいと思っています。

【西議長】

皆さんのお話をお聞きして、校種による温度差が大きくなっていくという問題があることがわかってきました。キャリアの問題などを考えると年齢が上がるほどコミュニティスクールが重要になってきます。そこに社会や地域がどうかかわれるかが大きな問題になってくると思います。

後で、早坂先生にコメントをいただきたいと考えていますが、私の方から都市部と中山間地でのデータ上の有意差はなかったかどうかを簡単に教えていただきたいと思います。地域性の差があるのかどうか後程聞かせてください。

次に二つ目の話題であります、信州型コミュニティスクール活動を充実させることで、子どもたちにどんな姿を望みたいのか、目指していきたいのか。どう長野県の人材育成を図っていくのか。様々な立場でご意見をいただきたいと思います。

【原田委員】

小池委員の方から校長が変わると学校教育目標が変わるというご意見がありました。しかし、今はそんなことはないと思います。どの学校もグランドデザインを公表するようになっています。そこには、地域の願い、学校の願いなどから学校教育目標を設定することになっています。学校長は、地域それぞれの願いをきちんと聞いて学校教育目標に落とし込んでいき、その具現の手立てを考えていくのが仕事です。私もそのようにしてきました。ですから、校長の意向で学校教育目標を大きくがらりと変えるということは難しいと思います。多少、表現が変わることはありますが。

また、学校長の仕事として、教育課程の編成があります。教育課程を編成する際に、地域を誇れる人間を育てるということは意識していると思います。そのため、地域から学んでいこうという気持ちはどの校長さんも持っていると思います。教育課程の編成にかかわって、小学校は担任の裁量で時間割などを替えることができますが、中学校は教科担任制の問題で、時間割が自由に変更できない分、自由度が少なくなってしまう。また、進学にかかわって学力をしっかりとつけるという大きな使命があります。まず、学力をしっかりと保障して、人間性も育成していくことを目指します。人間性を高めていくために、地域を理解して地域を誇れる人間になるということはどの学校でも共通していると思います。学力向上と共に地域学習はどこでも進められていると思います。地域を大切に子ども

ということは学校と地域が目指す子どもの姿になると思います。

地域コーディネーターが話題になっていますが、地域の方にコーディネーターをしていただけるようであればそんなにありがたいところはない。ただ、現実には引き受け手がいない状況です。ぜひ、そういうところに手を挙げていただける方がたくさんいるとありがたいです。

今は、開かれた学校づくりが進められているので、どんどん学校に言っていけばそれを受けて学校は改善していっていると思います。従って、昔のような閉ざされた学校と言われるようなところはもうないでしょう。

学校職員はだいたい3年で替わってしまいます。このことはネックになっていると思っています。人事は8年くらいでやっていくのがいいと思います。地域を知って教育していくと考えると、3年くらいでは難しいと思います。日本の教育制度は明治時代から6・3制です。子どもの発達段階や担任との関係を考えると、小学校の5年生くらいから教科担任制にしていくのがいいと考えています。私は制度も変えていく時期にきているように思います。目指す姿を抽象的なものにしないうためには、制度と共にダイナミックな長野県独自の教育スタイルが確立されることを期待します。

#### 【小池委員】

原田委員から小池委員がという話が出ましたが、校長先生が基本目標を変えるのは15年位前の話になります。今はグランドデザインなどを決めてみんなの意見を聞きながらと変わってきたと思っています。

ある教育関係者から教員は地域を知らないと言われました。地域の行事に参加していない、地域がどう運営されているかわからない。そこで、子どもたちに地域を知ってと言っても無理がある。先生たちは子どもたちと接するのは上手だけれど、地域の大人と接するのは苦手なように感じます。早坂先生の資料から教職員の負担が増えていることが示されている部分がありました。それは、先生方が今日はボランティアさんが来るからがんばらなくてはいけない、ボランティアさんを活用しなければいけないなどと、地域の方が来ることに何か身構えてしまっているということがあるのではないのでしょうか。

先生がもっと地域に入っていけないと子どもと一緒に学べないのではないのでしょうか。子どもたちの一番身近にいる先生方には、地域を楽しんでもらって、地域を大好きになってもらいたいと思います。そして、地域が大好きという気持ちで子どもたちに接してもらいたい。そういう先生と学んだ子どもたちは、都会などに出ていった後でも、いつかふるさとの良さを思い出して心の底に残っていると思いますし、そういう子どもたちに育ってもらいたいと願っています。諏訪には御柱や花火などの行事があります。諏訪に来られた先生方にはそういった行事などを楽しんでいてもらいたい。そして、先生方も子どもたちと一緒に、地域のよさを体感し共有していてもらいたいと思っています。

#### 【中田委員】

小池委員さんの今の意見にありましたが、学校の先生方は2・3年で異動してしまいます。ある赴任してこられた校長先生が、私は松本に来たのは初めてで松本のことはよくわからないんですよとおっしゃっていた。校区の地域のことを知らない先生がほとんどだと

思います。

そこで、私たちのところでは地域の歴史を先生たちに知ってもらおうと地域の冊子を持って行って、職員会議の中で勉強してもらおうようにしました。また、地域の中を歩いて見てもらおうということなどもやっています。先生たちも子どもたちと同じように地域を知ってもらうことが必要だと思います。三九郎とかが、松本では小正月の行事のことをこう呼ぶのですが、三九郎がどこで開かれるのかを示した地図を住民の人が作って、こういうところでやっているの先生方も時間があつたら見に来てくださいと学校に持って行ったりもしました。そういう資料もできるだけ学校に持って行くようにしています。PTAも含めて色々なところが連携していくことが大切だと思っています。

#### 【中條委員】

子どもたちが大勢の人と接するのが一番大事ではないかと日頃から思っています。祖母と一緒に育った子どもと核家族で育った子どもでは、人に対する思いやりが違ってきているように感じます。私たち婦人会は子どもたちに対して祖父母になつたつもりで接することを心がけています。そうすると声もかけやすくなってきています。以前、色んな人に声をかけられると危ないから逃げるようにというようなことがありましたが、今はそういうこともなくなってきたように感じます。地域の方が自分たちを見てくれていると思うと子どもたちも安心できると思います。私の考える子どもに願う姿としては、思いやりをもって人に優しい子どもに育ていってほしいということがあります。それには、多くの人と子どもたちが接するということが大事であり意義があることだと思っています。

#### 【小林委員】

校長先生も、教頭先生も他の先生も学校のことを地域の人を知っていると思つているところがあります。でも、地域の方は先生方が思っているほど学校のことを知らないですよと言つたことがあります。学校で起こっていることなどをもつと地域へ発信したらどうですかと提案しました。すると、学校から月1回くらい出される学校便りが地域回覧で回るようになりました。それだけでも、学校で行っていることが分かってもらえるのではないかと思います。私たちの公民館報でも、学校での出来事を写真などを入れながら紹介することを心がけています。

コミュニティスクールを運営するに当たっては予算が必要ではないかと思っています。この点には皆さん触れられませんでした。どうなんでしょうか。どんな予算が必要なのでしょう。例えば、印刷代、郵送代などはどうなんでしょうか。あと、他にも必要なものがあれば、ぜひ県で負担していただきたい。

#### 【黒岩委員】

願う子どもの姿ということで、生きる力をつけたい、イコール意欲がある子なのかなと思つています。例えば、中学生も忙しい忙しいと言いつつ、意欲的な子はいくつも車輪を回せて前に進めていけてしまう。どこかで歯車が狂つてしまうと、意欲がなくなり勉強も手につかない。さらに勉強をやりなさいと言われて学ぶことが面白くなくなってしまう。結局点数で評価されてしまう。自分の評価って何なんだろうというのが思春期の子どもた

ちにとって難しいところだと思います。

そこにもし、何か自分が机上での学び以外で認めらうものがあったり、認めてくる人がいたり、長い目でその成長を見続けてくれる人がいたりすると、勉強は嫌だけどこれだけは自分には勝るものがあるという誇りが持て、根本的な意欲が途絶えずにいくのかなと思います。その意欲を持って取り組めるという部分に背中を押してくれる大人が必要だと思います。願う子どもの姿ではないのですが、あるべき大人の姿としてそのようなことを思います。

先ほど、教職員のことについて、地域にできるだけ出向いてということでしたが、私は県教育委員会の教職員における働き方改革の会議に出させていただきました。今学校現場は、仕事は仕事として、退勤時間以降の電話の取次ぎなどもしないようになってきています。保護者と学校ですらかかわりを持つ機会が薄れてきてしまっているように感じます。そのような中で私として懸念しているのが、小さなトラブルが大きないじめにつながらないか、自殺につながらないかということです。そのために、小さな気づきを学校とやり取りできるとよいと思うのですが、時間外に保護者と話し合うことや、休みの日の地域行事に参加してもらおうというようなことは先生方に負担をかけてしまうということになってしまいかもかもしれません。

そういう状況で、学校の中で地域の方がちょっと入れる隙間があるといいのかなと思います。授業をサポートするとかでなくて、ただ空いている席と一緒に座っていて子ども達に少し声をかけてくれる地域の人が出てくれるといいと思います。また、そこで地域のつながりもできてくるといいと思います。今、両親が共働きの家庭が増えてきています。本来は家庭教育が大切なのですが、そこで補えない分を少し地域の皆さんに手を差し伸べてもらえると子どもたちがつまずきから立ち上がっていく勇氣になるのかなと思います。子育てのゴールが少し見えるようになった私としてはそのようなことを感じています。

#### 【長峰委員】

私の子どもや甥っ子が高校を卒業し、ちょうど大学や専門学校に進学したところですが、授業はオンライン授業で寮から出てはいけないと言われて本当にかわいそうに思います。これからどうなってしまうのだろうと、親として実感しているところです。義務教育から離れていけないのですが、これから世の中がどうなっていくのかを考えた時に、あらためて信州の自然豊かな地域でのライフスタイルが世界的にもスタンダードになってくるのかなと思います。子どもたちには、身近な地域で創意工夫をしながら持続可能な地域づくりに取り組むことの価値について、より強いメッセージを出していくべきではないかと感じています。コロナ禍の中で新しい未来についてSDGsの学びを積極的に取り入れていきたいと思っています。

#### 【西議長】

今SDGsという言葉が出てきましたが、持続可能な社会をどう作っていくかということとは子どもたちの教育の部分にかかわっているのではないかと思います。地域の力となってくれる人材の育成ということが今の我々に課されている大きな課題であると思います。

私自身は国語をベースとした教員ですが、子どもたちが地域への愛着、誇り、自己肯定感などをどう持てるのかということについていつも考えています。私自身が北海道の出身ということで、文化観が違うということにカルチャーショックを受けた経験があります。

大学生全国方言詩集というのがあるのですが、自分の地域の言葉で詩を作ろうという詩集です。そうすると自分たちの言葉に対する見直しが始まります。都市部に出て来て自分のふるさとがどういうものだったかを考えるきっかけになります。そこで、自分の育った地域や文化を言葉を通して学び直していくということになります。育った地域があるから今の自分があるんだという地域に対する愛着や自分の地域観を変えていくようなことも起こります。

地域のかかわりの中で子どもたちをどう育てていこうかと言った時に、開かれた学校としてコミュニティスクールとなっているわけですが、その時に先生方に地域を知っていただくというお話がたくさん出ました。先生週末お祭りがありますからということに、それは業務ですかと聞かれると非常に辛い。私は、先生に地元に住んでもらうことが大切だと思っています。そのことは、地元を知ってもらう、地元とかかわってもらえるための迎え入れ方の1つの手立てになると思っています。先生に見てもらい、聞いてもらうということではなく、地域の者として一緒に行うというスタンスに変わっていくように思います。

これまでのところを、早坂先生から少しコメントをいただければと思います。

#### 【早坂教授】

それぞれ感じる場所がありましたが、まとめた形で2つお話しさせていただきます。1つ目ですが、この議論を大きな流れでみる必要があるように感じます。大きな流れとはこれからの人口動態の変化です。高齢者が増え、子どもたちが減っていく中で、地域の学校をどうやって支えていくのか。この問題はどこの自治体でも議論を続けています。私も上田市の委員となって学校のあり方として統廃合なのか、地域に学校を残すのかという議論をしているところです。学校はこれまでと同じでは回らないという大きな流れの中にあります。また、これに合わせて人工知能の技術革新やそこに追い打ちをかけるようにコロナがやってきました。コロナのお陰でと言いますか、ギガスクール構想が加速して、パソコンやタブレットの普及が早まると考えられます。そういういい面もあります。学校が変わらなければいけないという大きな流れの中で色んな流れが押し寄せています。この流れの中で長野の子どもをどう育てていくのかを考えていく必要があります。原田委員が言われましたが、明治以来日本の学校は変わっていない。おっしゃる通り明治以来学校の仕組みは奇跡的に変わっていない。クラスに何人いるかという規模などは変わっているのですが、明治当初の村人を村の教育から国民に切り換えるための教育へ、つまり村から切り離す、敢えてつながりを断つことで日本の学校が誕生したという経緯があります。それが成功したので、そのやり方を捨てられずにその後もそのまま来ているというところがあります。これからの学校のあり方として、拠点地域に大きな学校を1つ作って、みんなを通わせるというやり方しか残らなくなってしまうのではなくて、地域でどうやって子どもを育てていくのかという、今まで学校に預けていた教育、いかに子どもを育てていくのかという意識を地域に取り戻すためにどうしていくのか。これを議論していくためにコミュニティスクールはまたとない機会を私たちに提供してくれているんだろうなと思います。

もう1つですが、ではどうやって学校を変えるのか。どういう方向で変え得るのか。今までボランティアだけだった人に、支援のみではなくて共に子どもたちの顔を見ながら、この子たちにどうやって幸せになってもらおうか、どうやって思いやりのある優しい子になってもらうのか、どうやったらこの子たちに色々な価値観を提供できるのだろうかなどということ、学校とひざを突き合わせて考え合い、地域が子育ての当事者として、どうかかわっていくのかが問われています。長野県の実績の中には、その参考になるポイントがいくつかあります。1つは松本型の話がありましたが、公民館が主たるコーディネーターを担うということは大いにあり得ると思います。そのポイントは、組織としてノウハウを蓄積していくことができるということです。地域の方が主たるコーディネーターを担っている場合、地域によってはそれが組織化されていないことがあります。あの人の時はうまくいくがあの人の後を誰が継ぐのかと後継者が途絶えてしまうことがあります。主たるコーディネーターを公民館が担っているというのは長野県の特徴です。そのため、公民館でクロス集計をかけてみたのですが、数値からはみえてこなかった。量的な調査の限界だと思います。ここは一校一校を訪ねて生の声を聞きながらそのよさを明らかにしていく必要があると思います。公民館がキーとなるもう一つの理由は、学校の中に地域の人が入って行くきっかけだけではなくて、子どもや先生を地域に引っ張り出すきっかけになり得るということです。公民館がコーディネーターとなっているところは、結構大きなイベントを起こすことができます。公民館がコーディネーターを担っている学校の取組をもう少し丁寧に見ていきたいと思っています。

社会福祉協議会の話もありました。社会福祉協議会は様々な立場の方々を個々ではなくネットワークで支えようとしています。そして一個一個違う事例と向き合って、その人の幸せのためにと協議しています。そのノウハウが学校に欲しいと思っています。社会福祉協議会の協議する力、熟議する力を学校にどうやったら取り入れられるだろうかと考えます。社会福祉協議会のコミュニティスクールにおけるコーディネーターの割合がもっと多くなれば面白いことになっていくのではないかと思います。社会福祉協議会との連携、融合が長野県で始まればと期待します。

最後に、西先生からご質問のあった都市部のコミュニティスクールと中山間部のコミュニティスクールで何か違いが出ていないかということですが、これも細かくクロス集計をかけてみていくつか言えそうなことはあるのですが、結果の数字だけが外に出て独り歩きするのが怖いと思っています。例えば、学校の中に専用の部屋があるといいという結果が出ると、専用の部屋を作ろうということになりますよね。でも、部屋だけ作ってもだめなんですよ。部屋ができ、そこに人が来て、関係性が作られるということが大切です。物理的な物だけ用意してもだめなのですが、数字はそれをさせてしまう部分があります。地域別の分析についてはかなり慎重にさせていただいています。長野県をよくするために少しでもお手伝いができる研究がさらに進められればと考えています。

#### 【西議長】

ぜひ今日の議論や早坂先生の調査の結果が全県で共有され、それに県民がどうかかわっていかなければいけないのか自分事として考えていくことが大切だと思っています。ぜひそのことを長野県として発信できるようになればと思います。

では協議4、最後になりますが、令和2年度の社会教育振興事業補助金について事務局から説明をお願いします。

**【県 山本】**

それでは資料24、25ページをお願いいたします。社会教育法の説明部分にもありますが、社会教育団体に補助金を交付する時には、社会教育委員の意見を聞かなければいけないという規定があり、協議4の内容をお諮りしております。

今年度の長野県の社会教育振興事業補助金についての案でございます。趣旨は、社会教育を振興するため、社会教育関係団体の行う事業に対し補助金を交付いたします。事業主体は社会教育関係団体ということで、公の支配に属しない団体で全県で広く社会教育に関する事業を行うことを主たる目的とする団体となっております。補助率は、予算の範囲内で対象経費の2分の1以内ということになっております。今年度計画されている補助事業者が、一般社団法人ガールスカウト長野県連盟さん。補助事業名が、2020年度ガールスカウト長野県連盟ジュニアラリーの1事業になります。269,000円の補助を計画しております。対象事業の概要ですが、事業者は一般社団法人ガールスカウト長野県連盟。事業名は2020年度ガールスカウト長野県連盟ジュニアラリー。補助対象経費は538,000円となります。教材費、会議費、印刷費等ということになり、旅費、宿泊費、旅費は参加者自己負担とし、それらを除いた経費として538,000円の2分の1、269,000円を補助したいと考えております。期日は11月となりますがコロナの影響で若干見直しがされるかもしれません。参加者150名。概要の目的は、日本のガールスカウト運動が100周年を迎えることを契機に、県内のスカウト同士の絆を深めて今後のスカウト活動の発展につなげるとともに、自分が暮らしている長野県への郷土愛を育む。また、より多くの人にガールスカウトの存在を知ってもらう。概要内容は、南北に長い長野県で、自分が住む地域と違う地域を訪ねることで、その地域の歴史、文化、風土等を知り、そこで感じたことや気づきをスカウト同士で伝え合うです。

以上、補助金についての説明となりますがご意見をお願いします。

**【西議長】**

では、今の補助金の提案についてご質問、ご意見をお願いします。

**【原田委員】**

コロナの影響で事業が中止になった場合、補助金の交付はどうなるのでしょうか。

**【県 小林】**

中止になった場合というご質問ですが、予め中止が決定している場合は交付を行いません。但し、開催日近くになって中止となり、準備等が進められていた場合には、その状況に応じていくらか補助金が支払えるよう検討したいと考えています。

**【原田委員】**

私も以前いただいたことがあるのですが、こういうことが中止になって補助金がなくな

ってしまうと、すでに色々準備にお金がかかっているということがあるので、そういう部分も対象に含めていただければと思います。

**【西議長】**

他、ご意見ご質問はいかがでしょうか。よろしいでしょうか。では、補助金についての協議は終了したいと思います。以上で、本日予定されていた協議は全て終了です。その他、何かございますでしょうか。

**【長峰委員】**

昨年からの台風19号災害の関係ですが、被害の大きかった長野市長沼地域、豊野地域でボランティアセンターの運営をさせていただく中で、社会教育施設、特に地域公民館を拠点としてお借りして大変お世話になっています。今年度は、職員2名を赤沼区公会堂に常駐させていただき、復興支援を続けているところです。このような災害が発生する中、あらためて公民館が復興への大きな力になるということを実感しました。そのことをご報告するとともに、益々連携をお願いしたいと思い発言をさせていただきました。

**【西議長】**

ありがとうございます。委員の皆様には議事の進行にご協力いただきましたことを心より御礼申し上げます。また、貴重なデータの報告ということで長野大学の早坂先生ありがとうございます。委員の皆様からお出しいただきました意見を県の取組に反映させていただければと思っておりますのでよろしくお願いいたします。では、進行を事務局にお返ししたいと思います。

5 閉会

以上